

「よさ」の更新によって〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる 造形科授業とカリキュラムづくり

造形科研究部

1 自分づくりと〈他者〉

「活動や作品をつくりだすことは、自分にとっての意味や価値をつくりだすことであり、同時に、自分自身をもつくりだしていることである」。学習指導要領（平成 29 年告示）解説図画工作科編の中でこう述べられる本教科は、自分の感じ方を元に主題を追求することを重視する、人格形成を担う教科の一つであると言える。一方で、自分の思いや感じ方に気づき、大切にすることは、他者にもまた別の思いや感じ方があることを理解するための重要な手がかりとなる。表現や鑑賞に自分を反映・投影させることを通し、自分に気づいたり、これからの自分をつくったりしながら、自分とは違う考えや似た感じ方をする〈他者〉との出会いを楽しみ、もっと知りたいと思える学習集団を目指す。

2 「よさ」の更新

〈他者〉との出会いや自己の見つめ直しにより自己を更新していく過程には、これまでにない美に関する価値の経験がある。この美的経験によって、「わかる」や「できる」だけを目指すのではなく、「よさ」や「美しさ」の認識を広げていくことを重視する。これまで気づかなかった「よさ」や「美しさ」を見つけたり、その価値を更新したりすることは、〈他者〉を楽しみ続けるための大きな原動力になると考える。

3 授業づくりについて（大切にしたい行為）

(1) 新しい価値や感性との出会い

〈他者〉との出会いでは、特に「鑑賞作品」について、単独の鑑賞活動だけでなく、児童の表現活動にとって新たな視点を与える造形表現や表現主題があるものを選定し、単元構成に組み込んだ。優れた芸術家の作品には、児童にとって創作のヒントとなるような、物事との向き合い方やつくりだす喜びなどが詰まっている。また、表現や鑑賞が自己内完結で終わらないよう、「友だちや教師の感性」という〈他者〉を立ち上げるための授業のしかけも取り入れる。意見交流の他に、製作途中の作品交換なども方法として取り入れ、新たな気づきをもたらすきっかけとなるようにするなどした。

(2) 選択と失敗ができる

材料を含む造形表現を〈他者〉として楽しみ続ける姿を引き出すためには、材料や表現方法に親しみ、くり返し関わるのが大切である。そのために、使いたい材料を自分で選んだり、表したいことに合った色や形を選んだりする機会を意図的に多くつくるようにする。また、失敗してもやり直せる材料や数の確保や、そもそも失敗が存在しないような表現の幅がある題材の設定なども、様々なことを心に感じて取り入れたり、能動的に表現や鑑賞の活動を行ったりする姿につながると考える。

(3) 自分にとっての意味や価値を見つける

表現や鑑賞が自分のことをふり返ったり、よさを見つけたりすることにつながるためには、個人の経験や思い出、思いや願いなどについて思考するような場面があることが望ましい。そこで、技能習得や上手にできることだけを目指すのではなく、オリジナリティや唯一性が引き出されるような主題を設定するようにする。その際、他教科との連携が有効な場合もあり、本年度は音楽科との連携を行い実践した。

(4) 自己受容・他者尊重、そして自己更新 ～メタ認知を働かせて～

ここまでの3つを達成するためには、一人ひとりの感性や表現そして経験やその時の感情までも受け入れてもらえる安心感が必要である。まずは教師が、そして教室のみんなで各々を大切にするという価値観を共有していく。そうして、自分について素直にふり返ったり、見つめ直したりする中で、「自分の“好き”はこれだな。」などと自己理解を進めたり、そんな自分をよしとする自己受容に向かったりすることは、個人の人格形成にとって必要な経験であると言える。同時に、自分勝手な独りよがりの個を育成するのではなく、互いに尊重し合う風土の中で、「もっとこんな自分になりたい」と、憧れを持って自己更新し続ける子どもを育てたい。具体的な方法としては、授業の中や終わりで自分の心の声や見方を確認するようなメタ認知的活動を取り入れるなどする。

4 カリキュラムを編む

ここまでを踏まえ、『よさ』『美しさ』を更新する抽象的な表現についての段階的体験や創造的活動」をカリキュラム構想の柱の一つとする。理由にはまず、自分自身を表そうとする活動において、具体的な物の形では表しきれないものが多くあることや、既存の形に似ているかどうかの価値基準だけでは芸術の良さが味わいきれないこと、またその価値基準が高学年から生じやすい苦手意識につながるものであることなどが挙げられる。また、様々な見方や想像が広がりやすい抽象表現を学ぶことを通して、友だちと考えを交流したり、自分とは異なる感じ方に出合ったりすることができる。パラアートやアートを通じた国際交流などにもつながりやすく、多くの可能性を持つ表現方法の一つだと考える。

(文責 芦田 桃子)